

生徒が先生になっちゃおう！ —生徒主体の母語体験ワークショップ—

黒田協子（神奈川県立相模向陽館高等学校）

1. 実践校紹介

実践校は首都圏にある昼間定時制高校である。昼間定時制とは、午前部と午後部の二部制の定時である。さらに実践校では在県外国人等特別枠受験による生徒のみならず、一般枠受験による生徒にも多くの外国につながりがある生徒が在籍する。国籍もアジアが多いが、中国・フィリピン・ベトナム・イラン・パキスタンをはじめ、ペルー・ブラジル・アメリカなどバリエーションが豊富であり、在県外国人等特別枠があるため、来日3年以内の生徒から日本生まれ日本育ちの外国につながる生徒まで、その背景も多様であり、定時制ということや移動の関係から過年度生も在籍している。さらに、実践校は学び直しが設立理念にあり、不登校経験者や移動を繰り返したため学びが定着していない生徒など学習経験の背景も多様である。そのため、日本語の授業はもちろん、多くの教科において個別対応授業を展開している高校である。

2. ワークショップ

2.1. ワークショップ（以降 WS）概要

「生徒が先生になる」という言葉通り生徒たちが先生役となり、教員に彼らの母語を直接法で教えるという WS を毎年行っている。これは、外国につながる生徒の対応が初めてという教員と日本語が十分でない生徒が出会う様々な困難と向き合い、さらに相互理解を目的としたものである。立場を逆転させることでお互いが持つ問題解決の糸口になり、また日本語ができないという劣等感を持っている生徒が、母語ができるという誇りを回復することが実践の大きな目標である。基本的なルールは「先生役は日本語（文字も）が分からない」「先生役も生徒役も英語等媒介語も分からない」「ジェスチャー、絵、数字、ローマ字、中国漢字は使ってよい」のみで、その強制はあくまでグループに委ねることにしている。強要することで、そこでのコミュニケーションの妨げになることや、未知の言語を学ぶ楽しさがなくなってしまうことを防ぐためである。

2.2. ワークショップ事前準備

WS では、教員と生徒との関係性を重視するため、グルーピングは日本語担当者が行う。担任・顧問・教科担当・管理職等外国につながる生徒と接している教員に声をかけ、教員と生徒の母語集団のグループを調整する。また、教員には生徒の来日体験を疑似体験してもらうためにも「多文化理解を目的とした WS」というのみで、詳細については伝えないこととしている。

2.3. 当日練習

WS 当日は1時間を練習の時間とし、事前に日本語担当者と話し合いを持ち、そこからグループごとにどのような方法で何を教えるかを決定する。さらにその時間で本番同様 15 分間母語の直接法指導を練習する。

2.4. ワークショップ本番

各グループに参加する教員の紹介と、ルール説明を教員に行い 15 分の WS を開始する。本番では、生徒たちは事前に練習した内容や、全く違う内容等を自由に母語のみで教える。15分

で1度止め、生徒用のアンケートと教員用のアンケートをそれぞれ記入しながら学んだこと、教えたことを整理し、その後全体でフィードバックしながらそれぞれ学んだことを共有する。

3. コーディネーターとしての日本語教師の役割

本WSを行うにあたり、日本語担当者による綿密な事前準備がある。今年度は日本語能力試験の翌週で年末休み直前に行ったが、これは日本語担当者と生徒との関係性が成立していることが前提にあり、さらに教員と生徒がある程度の面識があり、ラポールがあるため緊張感とリラックスをもって両者が行えるという状況と授業の進行や学校行事を妨げない日程を調整する必要があるためである。グルーピングはもちろんのこと、どのグループに誰(教員)を当てるか、といった教員と生徒との関係性を重視しながら教員の授業時程も配慮する必要がある。

次に、事前練習においては日本語担当者がルールを説明し、その後の全体練習では教員一人一人にも工夫があり①活動の趣旨、ルールを再度確認し、自分が日本に来た時何を話せるようになったか、なりたかったかの思い出をさせ、イメージできたら絵カードや教室を見渡しながら何でもが指導の教材になることを確認。個人的に自己紹介ができるようになりたいことをリクエストする(50代女性教員)②直接法で教えることをイメージさせるため、「最初に覚えた日本語は?」「どうやって日本語を勉強した?」「どういう風に教えてもらったらわかりやすかった?」などの問いかけを日本語で行い、生徒の国に行きたいけどどんな言葉が言えたら(分かったら)便利だと思う?というように単語ではなくコミュニケーションがとれる言葉を教えるよう誘導する(30代女性教員)③日本語を使わせないで言葉を覚える、または教えることの難しさを実感させる(30代女性教員)④直接法での取り組みを行いながら日本語を交え伝わっているか、伝わらないかを確認し、言いたいことと言いやすいこと、教えたいことを整理して本番でも同じようにできるよう順序立てていくことを心がける(30代女性教員)といったように同じWS準備でありながらそれぞれが自分の経験や生徒の経験を引き出しながら練習を行う。

本番では教員はタイムキーパー、止まってしまったグループの支援、生徒の励ましを行いながら巡回する。本番でも、教える側の生徒は楽しんでいるので苦勞している生徒役の先生への声かけを意識している。メモを見ながら「すごい」など。絵カードを適当に配る、生徒にはジェスチャーで励ます(50代女性教員)。といったように、ただ巡回するのではなく、両者が楽しめるような態度を取る工夫もしている。本番においては「日本語ダメ!」といった強い言葉でなく「日本語が聞こえるような…」といったその場の雰囲気を壊さないながらもできるだけルールを守ってほしいというような声かけも行っている。

4. 結果と考察

WS終了後教員と生徒両者にアンケートを実施し、教員の「「こんなことも分からないのか」でなく「こんなに頑張っているんだ」と思えた」「母語の生徒はなんてアグレッシブ!」という言葉、生徒の「自分の母語力の低さを実感した」「自分の言葉を教えられて嬉しかった」等普段は自分からあまり話さない生徒からも聞くことができた。また、教員へのアンケートにはWSを通して今後の指導や生徒との関係づくりに新たなヒントがあるかを問うたところ、教員各々アイデアがあり、本WSで様々な気づきを得られた。本WSにおける日本語教師は、生徒が主役になれるよう心掛けながらも、1回のWSではなく、教員生徒の学習につながるよう工夫が必要だと思われる。今後は、授業時程の関係で参加できない教員にも生徒理解につながるWSを展開していきたい。

付記、本WSに参加してくださった先生方、毎回新たな視点を持ち、盛り上げてくださる日本語担当の先生方に心よりお礼申し上げます。